

Title	トーマス・マンの変貌：「魔の山」への一試論
Sub Title	On Zauberberg : The evolution in Thomas Mann
Author	坂口, 尚史(Sakaguchi, Naoshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1968
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.26, (1968. 11) ,p.46- 59
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00260001-0046">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00260001-0046</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# トーマス・マンの変貌

## ——「魔の山」への一試論——

坂 口 尚 史

「魔の山」は、「ブッデンブローク一家」(一九〇〇)、「大公殿下」(一九一〇)に続くトーマス・マンの第三番目の長篇小説である。この作の構想は一九一二年にさかのぼり、その後第一次世界大戦間の中断をも含め十二年の歳月をかけて一九二四年に完成された。五十才に近い作者の手に成ったこの記念碑的作品は、マンが大きな変化をとげつつあった時期の代表作として注目される。すなわち初期の作品に好んでとり扱われたあの「精神」と「生」との鋭い対立のモチーフが、微妙に変化し複雑化しつつ背景に退き、発展させられた新しい視点からの、全体的な生の概念が主張されようとする。

しかしこの作も従前のマンの作品に共通した思想的骨格に支えられたものであることは否定できない。その土台は、謹厳な市民の一族が極度に洗練され、精神化されたために、「生」なるものの前に没落していく過程を描いた最初の長篇「ブッデンブローク一家」において確立された。作者の出発点は、十九世紀末期にいたって深刻化したところの、頹廢した市民文明の中における苦悩であり、市民社会の中で精神化に向かう芸術家の危機感であった。「魔の山」も、内部にひそんでいた精神化への傾向のために病氣にいたる主人公

を通して、以前の作品と同様のテーマが繰り返されている。けれどもこの主人公は作品の最後にいたって、没落や死には陥らない。イスの山中にあるサナトリウムでの数奇な体験を通して様々に陶冶されながら自己の立場を確立していくハンス・カストルプは、この点からみて、以前の作品における主人公達ほど作者との距離が近くない。作者の言葉を借りれば、「魔の山」は「旧作とは異なった生命の段階に立つ作品<sup>(1)</sup>」である。この作で主人公が理想の姿として夢みるのは、生と死との中間的位置であると言えよう。死とは、精神化にはじまり病氣にいたる過程の帰着点を意味する。カストルプはそのどちらにもくみしない。ここに、この頃のトーマス・マンが諸論文でも示した「中間の理想<sup>(2)</sup>」が具体化されているのである。それらの論文をも考えあわせて、マンがいかにしてそのような理想像を「魔の山」の主人公に託したのかをみていきたい。

二十三才の青年技師ハンス・カストルプは物語の中で最初の年の真夏、三週間の旅行予定で、北ドイツの故郷ハンブルクからスイスに向かい、高地ダヴォス村にあるサナトリウムを目差して登っていく。旅行の目的はと言えば、従兄弟ですでに五ヶ月間そのサナトリウムで療養を続けるヨアヒム・チームセンを見舞うためという単純なものである。この旅行は、彼を平地における人間関係から連れ出すという意義を担わせられている。主人公は市民の俗域を離れた休暇旅行者であり、その限りにおいて一種の自由人として療養所という一つの魔域の中へ入っていくのである。

この主人公は、作品の第二部で作者が彼の倫理状態について、きわめて示唆に富む解説を行なっているように、市民社会の中においては天才でもなければ馬鹿でもない。外見は全く平凡な人間である。ところが彼が平凡であったのは環境のせいであつたと作者はいう。すなわち彼の周囲は、「すべての労苦と活動の、最終的、超個人的、絶対的な意義を質問されても、うつろな沈黙でしか答えなかつた<sup>(3)</sup>」ので、彼は環境の人を奏えさせるような力に圧され、まだ超個人的な発展をとげずにいたのである。人は、内に潜在的な能力を持ちつつも、精神的にも肉体的に環境の力に支配されており、この力を打ち破るにはよほどの倫理的な孤立性と自主性、および非常に旺盛なヴァイタリティを必要とされるものである。そこでいわゆる英雄的なものを持たない青年カストルプとしては、環境に甘んじていざるを

えなかったのである。彼の選んだ造船技師の仕事は、格別な情熱の対象とはならず、彼はたとえ無意識であるにせよそかに解放を求めていたのである。

「ベルクホーフ」という名の、このサナトリウムに着いた主人公はまず、非常な高さにあるために下界とは全く異なっている空気、つまり香りと湿気とを欠いた空気に触れると共に、従兄弟からは当地での異常な時間の経過について教えられる。三週間の滞在を終えれば、再び平地へ帰るつもりでいたカストルプに従兄弟は、「三週間で帰るといふのは平地でのいい方」であること、当地では月単位で勘定するのが常識であることを教え、さらに、死体をそりに乗せて谷底へ落とす話を平然と語り、死というものがここでは市民社会におけるほどの重要性を持たないことを告げる。訪問者は、死がわがもの顔に横行する、エキセントリックな世界に紛れ込んだのである。病氣と死——これが小説の舞台であるサナトリウムを支配しているものであるが、それはそのまま、分解過程におかれた市民文明の病理学的側面からの象徴化であると言えよう。この「病氣」がカストルプの生への意志を衰弱させ、治ろうとする力を制して、彼を「平地」へ帰れなくしてしまう。この「病氣」とは同時にまたあるエキセントリックな、非市民的、非道德的な原理そのものとしてあり、これに犯された肉体の内に住む魂や精神を浪費や惑乱へと誘惑しはじめるものである。主人公に影響を与え彼を教育したのは、教育者として登場するゼテムブリーニやナフタといった主要人物のみならず、非市民的、非理性的な諸力の肉体化であるサナトリウムの住人たちであり、市民社会が課する規律と、節度と禁じられた境界をはみ出した人々である。そしてこのような特殊な環境をまっしてはじめて、カストルプの「天才」が開花していく。なぜならば、彼の中には「天才」が萌芽の形で存在していたからであり、同じようにサナトリウムへ来ていた従兄弟のヨアヒム・チームセンが、なら一般市民的常識を出ないまま、精神化の過程をたどらずに、早く平地へ帰り、軍人として兵役に就こうと焦って、自らの死を招いてしまっているのと対照をなしている。

○

さて高地へ来たカストルプは、そこを支配する湿り気を帯びない空気の力で知らぬうちに肺に「浸潤箇所」をつくっていく。という

のは、その空氣が治療によいということは反面、潜在する病氣の芽をいかになく発芽させるのに適當であるという前提を含むからなのである。そこへ主人公の魂をさらうべく現われるのが、アジア女のショーシャ夫人である。この夫人の大いにうさんくさいふしぎな魅力にとらえられ、ついには彼女の「内部肖像」(レントゲン写真)に向かつてせつなくも奇妙な愛の告白をささげるまでにいたるハンス・カストルプ。かくて彼はサナトリウムの魔界にますます深くからめとられていくのである。

一方対照的に、ショーシャ夫人に深入りすることをひきとめ、理性の力で彼を導こうとするイタリア人、ゼテムブリーニがあった。

この少し白髪混りの、スマートからはほど遠いが紳士的なイタリア人こそは、主要人物である過激なイエズス会士のナフタや、無意識の怪物ペーペルコロンが相次いで不可解な自滅をとげるのに対し、最後まで残ってカストルプに教育的作用を及ぼし続ける最も重要な人物である。カストルプは周囲の人物たちの誰にもくみしないが、「死の力に親近感をいだくことは、人間精神の最も悲惨な錯誤<sup>(6)</sup>」であるとする。この人文主義者の持つ牽引力のおかげで多く助けられて、非合理主義的な極端に走ることからまぬがれる。フリーメイソンの会員であり、イタリアのカルボナロ(炭焼党)の闘士であつた祖父を持つゼテムブリーニは、人類の進歩、文化の発展を理想とし、魔の山の停滞したアジア的(とゼテムブリーニは呼んでいる)雰囲気嫌い、西欧の子、文明の子として百科辞典の編纂にたずさわりつつ、進歩的共和国を夢に描くヒューマニストである。疑いもなくこの人物はトーマス・マンが第一次世界大戦のさなかに、書きはじめた大規模なドイツ論である、「非政治的人間の考察」の中で、「文明の文士」(Zivilisationsliterat)と呼んで敵視したタイプを想起させる。そこにおいて政治化された西欧文明の精神なるものを代表するものとされた彼らは、必然的にまた市民的なデモクラートである。ドイツの「文化」を担う「非政治的人間」であり、保守主義者であるマンにとって、啓蒙、理性、進歩の代弁者、「第三階級」とその解放運動の加担者である、これらの文士たちは、端的にいつておめでたく輕薄に映つたのであつた。

ところが、このゼテムブリーニと正反対の人物がもう一人登場し、そこにカストルプをめぐる争奪の闘いというべきものが展開されることになる。その人物はナフタと称し、中世神学者的、ドグマ的な世界同胞主義者である。ポーランドの南部に生まれ、瞑想的な律法の批評家であつたが、分派的異常性をもっていたため民衆運動ではりつけになつた父の影響を受けていたナフタは、やはり方々で周

匪と摩擦を起こし、結局スコラ哲学者としてイエズス会に入団していた。第六章の「神の国と邪惡な救済」における、中世のピエタの彫刻をめぐるこの人物の考えは、きわめて中世的、スコラ的、非自由主義的である。彼はかつて教会が行なった刑罰や火刑や破門を承認し、それらが正当であつたことを強調する。彼にとっては、教会こそ国家概念に優先すべきものであり、ゼテムブリーニの唱える市民的世界共和制も、彼にとっては単なる皮相的な現世市民主義にしか映らない。彼が求めかつ、現代が必要とするものは、過去五百年間に死滅したと彼のいう、革命的自由主義ではなく、テロであり、「束縛と強制と服従<sup>(7)</sup>」である。ナフタが理想とする社会状態をつくるには戦争は不可避である。また人間性を神と自我との相剋としてとらえるナフタにとっては、これを単に社会と自我の相剋として経験するにすぎないゼテムブリーニは、個人の内面的葛藤を理解することなく、いたずらに個人的利害と全体的利害との争いのみに夢中になった、人生それ自身を目的と考へ実益のみをねらう市民的倫理性の代弁者にすぎなくなつてしまふ。

小説の半ばあたりにおける両者の対決は、「雪」と題された章の直前にいたるまで続けられる。ナフタの狂信的な、悪意を含んだ詭弁をゼテムブリーニは最も嫌い、「死に隣接した淫蕩なもの<sup>(8)</sup>」だと決めつける。事実、ナフタの思想は死と多くの關係をもつていた。逆にナフタの方から言えば、ゼテムブリーニは「道德狂」である。二人はあぐくのはてに決闘となり、民主主義者の臆病さに業を煮やしたナフタがみずから自分の頭に弾丸を撃ち込むという驚くべき結末を迎える。

両者の論争に従順にかつまた狡猾に聴き入りつつ、みずから独自の立場をとつてゆこうとするカストルプは、そのころにいたつてサナトリウムの空氣に対する順応を完了する。愛と死とは一つであることを体験させてくれたショーシャ夫人に向かつて、カストルプはかつて、「僕は以前ほど死に印象を与えられないんだ。」と、フランス語で告げた。おりから、故郷から彼の叔父がはるばるサナトリウムを来訪して、彼を連れもどそうとしたが失敗に終る。ゼテムブリーニの心配をよそに、主人公はますます完全な自由の身になって、魔の山での冒険を続けていくのである。

サナトリウムの空気への順応を完了した主人公は、ゼテムブリーニやナフタ、その他の人物に接しながら、自分自身のあり方設定にとり組んでいた。決してもはや「ヴェニスに死す」の主人公グスタフ・アッセンバッハのごとく、病氣と死とに征服されることなく。さて、第六章「雪」の章は、主人公の独自の立場がはじめてうち出されるシーンを含んでいる点で注目される。ある日カストルプは、雪で蔽われた、荒涼とした山々ともっと親密に接したいと望み、ひそかにスキーを買ひ求めて山中へ向かう。そして激しい吹雪のため道に迷う。体力回復のためのポートワインが、ただ一人で山中にいる彼に夢を見させる。

この小説の一つのピークをなすところのかの夢の場面において、まず海辺が現われ、そこでさんさんたる太陽の光を浴びた人々が動きまわっている。健康で聰明な、幸福な人達、すなわち太陽の子らである。と、その中の一人が不安げに彼方を指すので、そちらに目を移すと、列柱をもつ暗い神殿があった。中へ入っていくと、その奥で、白髪を乱した醜惡な老婆が嬰兒をひき裂いて食べている恐ろしい光景に遭遇する。主人公は夢中になって外へ逃れ出ようとするが、気がついてみると自分は海辺の人々を見るかす、神殿の台石の上に腰をかけていたのであった。

カストルプが居場所を定めたその位置は、海辺の健康な人々の共同生活を眺めながら、暗い神殿を背後に控えるところ、すなわち双方の中間である。彼は次のように言う。——「僕は石柱の台石のそばから悪くない眺めを持っている。……僕は人間の位置を夢み、恐ろしい血の祭典を背後にせおった、人間の礼儀正しい、聡明で敬虔な共同生活を夢みた。太陽の子らは血の饗宴の恐ろしさを顧みてあのように互に礼儀正しく優しいのだらうか。もしそうだとしたら彼らは優雅であり、全く優美な結論を持つであらう。」死と生、病氣と健康の中間にあつて、人間は生活を営むべきであるという結論、つまり中間的位置にいるものとしての理想の人間像を彼は夢みただであった。「死の冒険は生の中に含まれ、それがなければ生は生でなく、その真中に神の子であるべき人間 (Homo Dei) がある。」さらにカストルプは、ナフタやゼテムブリーニを批判し、両者と自分とを峻別する。——

「一人は淫蕩で悪意を含む、神と惡魔、善と惡のごちゃまぜであり、個人がさかさまに墜落し共同体の中へ神秘的に呑み込まれることに向かっている彼の宗教とは相入れない。一方一人はいつも理性の角笛を吹きつけ、狂人をも冷静にできると思ひ込んでいるが、

無趣味なことだ。俗人趣味で、ただの倫理の域を出ないもので、非宗教的である<sup>(11)</sup>。——彼は死の神殿に閉じこもるものではないが、かといって海辺で健康な共同生活を祝う太陽の子らに混っているのでもない。

○

カストルプのこの中間的位置なるものは、中期のトーマス・マンが諸論文で述べている内容と大いに関連づけて考えられる。この点については論文「ゲーテとトルストイ」(一九二三年)がまず最も重要なものとしてあげられる。そこにおけるマンは、ゲーテ、トルストイ、シラー、ドストエフスキーの四人の作家について、便宜的に前二者を「造型」のタイプとし、後二者を「批評」のタイプとして分け、双方が互に影響するところの大きかったことから論じ始める。ゲーテやトルストイが、シラー、ドストエフスキーよりも長寿を保ち得たのは、両者が神々しいまでに自然の愛を受けた人間性の所有者であり、自然あるいは、神の子とも言うべき存在であったからである。マンの表現を借りれば、「大地に体が触れている限りは、その母なる大地から常に新たな力を受けていたので、敗れることがなかったという伝説の巨人アンタイオスのような力を持った」<sup>(12)</sup>ところの両者にしてはじめて、自然と結びついた「造型」が可能なのであった。一方シラーとドストエフスキーは「自然」に対して「精神」を代表する。彼らは素朴な、客観的な、健康なものに対応する感傷的な、主観的な、病的なものを多く持っている。彼らは「自然」の外に立って人生と自然に対立し、分析的な態度でもってこれに臨もうとする。その作業は「批評」である。マンはタイプが異なると断じた作家たちを、このように明快に論じ分けているが、マン自身は、自己を、自然に恵まれた「寵児」としてよりは、自然から離れて批評を行なう後者の立場として認識していたものと思われる。その証拠にマンは「批評型」の方を、より一層「人間的」であると呼んで、シンパシーを示しているにもかかわらず、彼の視線はゲーテとトルストイから執拗に離れないでいる点が注目されるのである。

思うにゲーテやトルストイは、恵まれた自然の寵児にちがいがなかったとはいえ、いずれもまさにそのような自分に対する自己否定を知らなかったわけではなく、むしろ逆にそれを怠らなかった者たちであり、そのようにして自己の「精神化」に努力した者たちであっ



たのだ。特にトルストイの自己否定はゲーテのそれよりも強く、自然から意識的に遊離することによって「人間らしく」なることを志し、このため自己の造型的才能を長い間内部で押し殺そうとし、結局は病気に罹る。しかし、シラーやドストエフスキーとは異なつてこの両者共彼らの病氣によって破滅したのではなかった。トルストイにとってはシベリア旅行が、ゲーテにとってはイタリア旅行がバランスをとる上で大きな役割を果たすことになる。両者にとつて精神化は至上命令であつた。なぜなら苦勞を経ない (mühselos) 自然は粗野というものであるゆえに、精神化ということが自然の子にとつて必要欠くべからざる務めであるからである。「逆に」とマンは、この論文の終り近いある章の終りで結んでいる。「精神の子らの至上命令は肉体化である。……両方が互に憧れ求め合う途上において、精神と自然とが相會うこと、そのことが人間を生み出すのである。」と。<sup>(13)</sup>

精神と自然とが高く相會う時を人間の理想としたこの論文は、「人文主義に関する十六の試論」と副題のついた評論集「精神の高貴」に収録された。「魔の山」完成前に執筆されたものである。ハンス・カストルプは夢の場面で、彼が理想とした中間的位置は、死と生、健康と病氣が互に懂れ合いつつ出會つた姿にはかならない。カストルプは精神化の道をたどり病氣になつていくが、作者は、つきまとう病氣から脱し得ずしてそのために破滅した「精神」の代表者であるシラーやドストエフスキーの姿ではなくゲーテやトルストイの生涯に學んで、主人公が「暗い神殿」とらわれることから救うのである。これは自分自身病的、破滅的な傾向を強く持っていたトーマス・マンが、シラーよりもゲーテの方に、ドストエフスキーよりもトルストイの方に支点を求めて自己のバランスを保とうとした努力の表現である。マンはあるところで、「私は均衡の人間です。もし舟が右へ傾いたとしたら左へ体を寄せ、逆のときはまた逆のことをするのです。」と語っているが、彼の作品に現われた主人公たちを見ると、「魔の山」にいたるまでの作品の主人公たちは、まさにこのバランスを保ち得ずして没落していく場合が多かつた。それが「魔の山」では、カストルプに、周囲の諸力に対するアイロニカルな優越性が与えられている。論文「ゲーテとトルストイ」の中の「告白と教育」と題した章の中で、ゲーテと「ウィルヘルム・マイスター」の主人公との關係について言われたことが、そのままトーマス・マンとカストルプとの關係にあてはまる。——「改善と完成とを必要とするこの感情、また自分の『我』というものを一つの課題、倫理的、美的文化的責任として感じるからこそ、自伝的教養小説や発

展小説の主人公において客観化され、またそれに対し詩人の自我が指導者、形成者、教育者になるところの一個の『汝』として対象化されるのである。<sup>(15)</sup>すなわち、カストルプの姿に客観化されたものは、このような意味における作者の「我」であり、その進化にはかならないのである。

カストルプの中間的位置は、周囲のいづれに対してもイロニーを投げかけることを可能にする。このイロニーはかつてまだ「精神」と「生」とが対立していたとき、それでもって精神が、最大限の自己放棄を行ない、それでもなお、愛情ある輕蔑をもって生へと近づくために努力したような、「トニオ・クレーゲル」時代の「センチメンタルなイロニー」(バウムガルト)ではない。病気に負けないことを誓ったカストルプは、ナフタやゼテムブリーニに加えて、「さらに一人」サナトリウムへやってきた、生の化身のような人物、ペーペルコルンに対しても、距離を保ち続ける。カストルプが憧れるジョーシャ夫人と共にサナトリウムへ着いたペーペルコルンは、幅広い胸と、波うつ白髪 of 王者のような頭をそなえ、その大人的風格はナフタやゼテムブリーニをも包含してしまうようなスケールさえ感じさせたが、たくましいわりには中味の空疎な人物であった。彼には思想が、思想の明確さが欠けていた。それ自身大きな生の賜物ともいふべきペーペルコルンは、その賜物をみずから生かすすべを知らぬまま、みずからに倦み、そしてあえなくそれを窒息させてしまう。主人公はこれらの諸人物によって担われた生のさまざまな要素を、弁証法的に止揚しつつ前進していかなければならない。生きるあるいは生き抜くということは、そういうことなのである。

○

カストルプの中間的位置に見られるように「魔の山」はそれまでの作者とは異なるところの、大きな変化をとげた後の作者の手に成るものと言われる。それはたしかに作者の変化にはちがいないが、この時期に書かれた「非政治的人間の考察」と、その二年後に現われたきわめて問題的な講演、「ドイツ共和国について」とを比べてみた場合、なるほど後者は、民主主義を受け入れたという点で一種の鞍替えの表明ではあるものの、両者に流れている共通した点を見逃すわけにはいかない。そこに保守主義者としての立場を守ろうと

しながら、進歩してゆこうとするマンの姿勢がうかがえ、まさにこうした態度がカストルプの造型に反映しているものと思われる。

第一次大戦中、マンは「魔の山」制作の間に、「非政治的人間の考察」と題した一連のエッセイを公にしていた。このエッセイの語りは本質的に十九世紀の子であると自称している。市民的な物語作家の後裔であり、ドイツ名人気質を受け継いだ芸術家である。そしてロマン主義、ベシミズムというものはや過去に属する空気の中に生きている。彼は、彼がドイツ特有だという「文化」、魂、芸術、音楽を護り、ドイツの非ドイツ化を防ぐため、敵である「文明」の進歩主義者たちが万人にデモクラシーを普及させようとするのに挑戦を試みる。彼の保守主義はドイツ弁護に結びついている。ドイツが相対するのはローマの西欧である。ローマの遺産であるクラシック精神は、明晰な理性をもって人間の美と品位とを賛美するのに全力をつくすが、「非文学的な国」ドイツに住む論者は、これを「文学的」と呼んで軽蔑する。文学は根底からデモクラティックなものであり、「文明」的であるのである。そのようなローマ的文明が市民的に政治化されて、精神による世界の植民地化を目標として現代の思想界を制覇しようとしてきた時、ドイツの代弁者たる「非政治的人間」は、かつてルターがローマに対抗したように断固として戦うのである。「文明」の政治形態としてのデモクラシーは、彼にとって一つの規格(Norm)によるすべての平等化平板化を意味する。ドイツ特有の「文化」こそは、そのような一定の規格をのり越えるべきものであり、均等化され得ない性質のものであるのだ。「文明」側の平板な平等主義を代表して共和制を目標にする人々、「文明の文士」であり、「魔の山」のゼテムブリーニはその一人である。一芸術家として訴えたトーマス・マンは、ドイツを擁護するために、正義を政治的な叫びとしか考えない人々と戦い、保守主義を貫こうとしたのであった。

しかし第一次大戦の終結と共に、ドイツを含めてヨーロッパは、「文明の文士」が意図したとおりになっていた。ドイツ文化は旧式の国家(Staat)の中では存続できず、共和国(Republic)とデモクラシーとを受け入れなければならないようになってきていた。マンの戦争中における長期間の闘争は、自ら後に表明したように、「負けると分っていた退却戦」であつた。<sup>(16)</sup>彼の転向への準備は、「非政治的人間の考察」を通じ、徹底的な自己認識、あるいは自己限定がなされることですでになされていたといつてよいであらう。

かくして、講演「ドイツ共和国について」は、「非政治的人間の考察」刊行後三年目にベルリンのベートーヴェンホールでなされ、

一般に、以前保守的立場をとっていたマンが、今年は全面的にデモクラシーを肯定したという点で大きな転換、あるいは鞍替えとされたのである。このため講演会場に合わせた一部の学生には、マンは背教者と映ったようである、しかしわれわれは、それらの人々のように、マンの表面的な正負の符号の変化だけを見るのではなく、この彼をより深い認識において理解せねばならない。たしかにマンは「私は一つの真理を一生大事にしたいとは思わない。新しい生命力をもつ魅力あるものとして、私は新しい真理が欲しい。」<sup>(17)</sup>と言ひ、かつての立場からみれば裏切者であり自己否定者となることを充分に承知しつつも、「我々の政治に対する疎遠は過去のことになった。」<sup>(18)</sup>と言ひ、新しい人間性を發展させるには共和国の政体以外にないとして、共和国を榮譽ある地位にひき上げ、賛美している。

けれどもここで注目すべき点は、彼が全面的に共和主義者に転向したのではない点である。かつての「非政治的人間の考察」の中に次のような言葉がある。「私は受けとり、学び協調を求め、自分を修正することが出来る。しかし私の本質を変えることは出来ない。私の根をひき抜いて他の場所へ埋めることはできない、と悟らねばならない。」<sup>(19)</sup>前と一見矛盾しているようにみえるこの態度は、もともと伝統的なものを大事にするこの作家が、自分の「根」を持ちながら新しい人間性を發展させるために共和国をとり入れたものと考えざるべきであろう。この点が、「ドイツ共和国について」の中では、ノヴァーリスの政治観を述べることによって説明されている。ロマン派の詩人ノヴァーリスは、ナショナリストでとあったいう点で以前のトーマス・マンに親近感をいだかれていたのであったが、この講演ではノヴァーリスがユニヴァーサルイズムをも持っていたことが論証される。プロイセンの国王に敬虔な熱狂を示して王権を奉じていたノヴァーリスは、半面国家観においてフランス革命の影響を受けており、そのため王権と共和主義とを両立させようとしていたのだとマンは説得する。すなわち、共同体の中でいかにして個人を生かすべきかということがノヴァーリスの理想であったのであり、この点でアメリカの詩人ホイットマンと共通の考えを持つ人であったとされる。彼は王権の中に民主主義的―共和主義的な視点をすえていたので、「一種のロマン的ジャコバン主義」と呼ばれたのである。<sup>(20)</sup>これは言いかえれば進歩的保守主義であり、マンはノヴァーリスを援用することによって自己の立場を釈明しようとする。ノヴァーリスの「箴言集」の中から次のような部分が引用される。――「かくして必要なことは、新しい必然的なものを樹立し、新しい純粋な結晶作用を誘発させるために、ある時期にすべてのものが水に

流されることである。しかしそれと同様に、危機を和らげ、全部流れ去るのを防ぎ止めることも又必要なのである。一つの陸地ないし核を残すことが大切で、その周囲に新しい固形がくっついて新しい形ができ上っていくのである。<sup>(21)</sup>……」マンはこれを一種の保守主義ではあるが、過去と反動とにつながる保守主義ではなく、未来につながるところの保守主義であると言っている。講演者もまた、「陸地」であり「核」であり、「根」を内側に持っていた。したがって、すべてを水に流してしまう革命家にはならなかったのである。

ハンス・カストルプに話をもどそう。彼も「死に支配されない」一線を確立しつつも、精神の世界を離れてはいない。もし百八十度の転換をとげたのなら、太陽の子らと共同生活を営んでいるであろう。また作中で、自覚のない生の化身としてのペーペルコルンが自滅するのを見ることもなかったのである。カストルプの中には精神化の跡が歴然と残っている。第七部の「楽音の充満」の章で、彼が蓄音機で愛聴する様々な音楽の中には、死への憧憬を示したヴァーグナーの「トリスタン」のような作品はなく、オッフエンバックヴェルディ、グノー、ビゼー、ドビッシーといった南欧系の音楽家の作品が数多くあるものの、やはりシューベルトの「菩提樹」が必須のものとして入れられているのである。この歌は、一見清純なそのかたちの背後に、かの禁断の世界を秘めっており、この歌に対して精神的親愛感を持つことは、死の世界にかかわろうとすることであって、ことによればそれは陰惨な結果を招きかねないものである。そうした「淫蕩な死」の魔力を克服しようとしてこの主人公は全霊を傾け思索した結果死に支配されることからはまぬがれた。しかし死を宿す世界を忘れ去ろうとはしていない。カストルプにとって生と死の中間の位置が、「生と人間性自身の理想であるかのごとくに」<sup>(22)</sup>思われたのであった。

「魔の山」は一市民がふだんとは全く異った環境へ入ることによって「非市民化」<sup>(23)</sup>していく物語であるが、主人公は周囲の極端な思想の数々を止揚して中間に位置を定めた。トーマス・マンは芸術家としてこの位置を理想とし、その位置を主人公に具体化したのである。中間的位置は、そこから芸術が自由を獲得して、イロニーを武器に飛躍してゆける場である。生の世界と精神の世界とが存在するとき、生の世界の中でのみ完全になろうとするとイロニーは得られない。生の世界から抜け出し精神の世界との間で両者の挑発を受け

るときにイロニーが生まれる。芸術家は、イロニーをもって、生と精神の両方に向かって相対する立場に立つべきであるというのが、「魔の山」執筆を完了したトーマス・マンの思想であった。このことはすでに、「非政治的人間の考察」の最終章、「イロニーとラディカリズム」で、「芸術の役目は、精神と生との中間にあって大使の役目を果たすことになる。」と述べられていることである。イロニーは、ラディカリストではなく、観察者が武器とするところのもの、すなわち行動派の政治的人間ではなく、文化の伝統を守護しようとする芸術家の武器であった。下界からサナトリウムに登ってきて精神化を経験した市民、「人生の厄介息子」(ein Sorgenkind des Lebens)であるハンス・カストルプは、両方の世界を総合しようとし、作品の中では戯画化されている多くの極端な思想を学び終えて第一次大戦の渦巻く下界へ降りていくことが出来たのであった。

註1 「精神的生活形式としてのリネーベック」"Lübeck als geistige Lebensform" Rede, 1926 ("Ales und Neues" S. Fischer Verlag 1961 S. 292)

- 2    ibid. S. 293
- 3    "Der Zauberberg" 1924 (S. Fischer Verlag 1930 S. 48)
- 4    ibid. S. 16
- 5    Gene-ibid. S. 779
- 6    ibid. S. 265
- 7    Bindug, Vergewaltigung, Gehorsam ibid. S. 609
- 8    ibid. S. 538
- 9    ibid. S. 646
- 10   ibid. S. 647
- 11   ibid. S. 646
- 12   "Goethe und Tolstoi" 1923 ("Adel des Geistes" S. Fischer Verlag 1959 S. 190)
- 13   ibid. S. 237
- 14   Briefe an Karl Kerényi, 20. Februar, 1934 ("Ales und Neues" S. 708)

- 15 "Goethe und Tolstoi" ("Adel des Geistes" S. 249) 高橋義孝訳 249°
- 16 "Kultur und Sozialismus" 1921 ("Rede und Aufsätze" S. Fischer Verlag)
- 17 "Von deutscher Republik" 1922 ("Sorge um Deutschland"—Sechs Essays S. Fischer Verlag 1957 S. 21)
- 18 ibid. S. 21
- 19 "Betrachtungen eines Unpolitischen" (S. Fischer Verlag 1956 S. 209)
- 20 eine Art romanischen Jakobinertums—"Von deutsche Republik" S. 25)
- 21 ibid. S. 22
- 22 "Lübeck als geistige Lebensform" ("Alles und Neues" S. 293)
- 23 die Enbürgerlichung-ibid. S. 293
- 24 "Betrachtungen eines Unpolitischen" S. 563